狭衣物語

上

鈴木一雄　校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第六八回）

狭衣物語（さごろもものがたり）上

昭和六十年三月十日　印刷
昭和六十年三月十五日　発行

校注者　鈴木一雄（すずきかずお）
発行者　佐藤亮一
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社　新潮社

〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　加藤製本株式会社

定価一七〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Kazuo Suzuki, Printed in Japan, 1985.

ISBN4-10-620368-5 C0393

目次

凡例……三
巻一……七
巻二……一三五
解説……二五七
付録
校訂付記……二八七
狭衣物語系図……二九二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡　例

一、本文は旧東京教育大学国語国文学研究室蔵『狭衣』春夏秋冬四冊本を底本とした。同写本は流布本系統の比較的善本で、室町時代末頃の書写にかかり、元和九年（一六二三）開板の古活字本に最も近く、それよりやや前に位置する。

一、本文は底本をできるだけ忠実に活字化することに努めたが、変体仮名を普通の仮名に、仮名づかいを歴史的かなづかいに統一したほか、適宜に段落を分けて改行し、仮名に適宜漢字を宛てたり、句読点や会話符号を付するなど、底本の表記を読みやすく改めてある。

一、底本の明らかな誤写と考えられる個所は、他本などによりこれを改めたところがあるが、できるかぎり底本本文を尊重した。やむを得ない訂正は、これを「校訂付記」のかたちで示した。

一、傍注（色刷り）は主として現代語訳を、頭注は主として説明および和歌の解釈を示したが、スペースなどの関係で便宜に従ったところも多い。傍注において、本文にない言葉を補った場合は「　」印を、会話の話者や心中思惟の当該人物を示す場合は（　）印を付した。なお頭注で紹介した和歌のうち作者名を記してないものは読人知らずの作である。

一、傍注の現代語訳や頭注の和歌の解釈は、原文の表現性を過不足なく伝えるとともに的確な現代語訳であることを念願し、かつ努めた。

一、頭注欄に、比較的小刻みに色刷りの小見出しを掲げた。これに添って検すれば梗概が辿れるよう工夫したつもりである。

一、巻末の解説は、『狭衣物語』のおもしろさや物語文学としての性格、文学史上の位置などが理解できるよう心がけた。作者についても言及している。

一、本書は、上下二冊に分冊したが、上冊には底本の「春」「夏」を通行の巻一、巻二としてこれを収め、下冊には底本の「秋」「冬」を巻三、巻四として収めた。付載の「狭衣物語系図」は上冊用のものである。

狭衣物語 上

卷

一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一 白楽天の詩句を引く起筆。春の推移を述べ、主ノ公の青春をも暗示。「燭ヲ背ケテハ共ニ憐レブ深夜ノ月 花ヲ踏ンデハ同ジク惜シム少年ノ春」（『白氏文集』巻十三。『和漢朗詠集』『千載佳句』）。六条斎院宣旨に「惜しむにもとまらぬものと知りながら心砕くは春の暮かな」（天喜四年閏三月『六条斎院家歌合』題、暮の春）の詠がある。

冒頭――いきなり一場面を置く　恋慕憂悶の主人公を描き、主題を指示

二 「三月の二十日あまり」以下、『源氏物語』胡蝶巻頭、また『和泉式部日記』冒頭の行文に類似。

三 「夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな」（『拾遺集』夏、源重之）を引く。

四 「わが宿の池の藤波咲きにけり山ほととぎすいつか来鳴かむ」（『古今集』夏）を踏む。

五 祐子内親王家小弁に「いひやらむ方のなきかな池水の水際に咲ける八重の山吹」（『夫木抄』巻六）。

六 山城国綴喜郡。山吹の名所で古来和歌に詠まれる。「蛙なく井手の山吹散りにけり花の盛りにあはましものを」（『古今集』春下）など。

七 紹介のないまま、主人公はすでに思惟し行動を起している。印象的な描出。

八 近習の少年で愛らしい子に命じて。

九 女主人公。この一場面の後に改めて紹介される。

一〇 東宮。皇太子。主人公は東宮と親しいらしい。

少年の春は惜しめどもとどまらぬものなりければ、三月の二十日あまりにもなりぬ。御前の木立何となく青みわたりて木暗きなかに、中島の藤は、松にとのみ思はず咲きかかりて、山ほととぎす待ち顔なるに、池の水際の八重山吹は、井手のわたりにことならず見渡さるる夕映えのをかしさを、ひとり見たまふも飽かねば、侍童のをかしげなるして、一枝折らせたまひて、源氏の宮の御方に持て参りたまへれば、御前には、中納言、中将などやうの人々候はせたまひて宮は御手習ひ、絵などかきすさびて添ひ臥させたまへるに、「この花の夕映えこそ、常よりもをかしく侍れ。春宮の、『盛りにはかならず見せよ』とのたまはするものを」とて、うち置きたまふを、宮、

（一少年期の春はいくら惜しんでも）（今年も）（二やよひ）（はつか）（三松はもとより他の木々にも懸って花房を咲き垂れて）（四山ほととぎすの訪れを）（五池の中島の）（六あの山吹の名所井手の辺りに負けぬくらい見事）（七狭衣中将は）（物足りないので）（八さぶらひわらは）（ご殿の方に）（九中納言・中将などといった女房たちを）（さぶら）（伺候させなさ）（狭衣）（に熱中なさって脇息にもたれふって）（花が夕陽に映えている風情こそ）（普段より趣があります）（一〇とうぐう）（花盛りの折には）（見せてくれよ）（仰せになるほどですのに）

一「例の」の語に、主人公の源氏の宮恋慕の日常がうかがえる。

二 引歌があるらしいが不詳。藤原定家「匂ふより春は暮れゆく山吹の花こそ花の中につらけれ」（『続古今集』春下）は時代がくだる。

三 前文に山吹一枝を持参とあったが、実際には藤の花などをも取り合せて差しあげたものか。

四 梔子（くちなし）はアカネ科の常緑低木。秋、黄色の実をつけるが、熟しても口を開かぬところからこの名がある。古来黄色の染料に用いられ、くちなし色という。山吹色に同じ。和歌では「口無し」に掛けて多く詠まれる。「山吹の花色衣主や誰（たれ）問へど答へず口無しにして」（『古今集』雑体歌、素性）など。

五 源氏の宮恋慕を打ち明け得ない主人公の心が籠められている。

六 主人公の内心を知らぬ中納言の君の、それなりに気の利いた応答。花に比して葉が多い―「口無し」にしては「言葉」（和歌）が多いと洒落（しゃれ）たのである。「さるは」は逆接の接続詞。だが、しかし、そのくせ。

七 どうしたらよいものか、山吹の花同様、思うことも口に出せぬくちなし色のわが身なので、私の心を知ってくれる人もないことだ。

八 定家の引く古歌「奥山に立つをだまきのゆふだすきかけて思はぬ時の間ぞなき」（『僻案抄（きあんしょう）』）を当てれば、恋い焦がれて思わぬ時とてない、の気持。

九 主人公は、すでに自室に戻っているのである。

すこし起きあがりて、見おこせたまへる御まみ、つらつきなどのうつくしさ、花のにほひ藤のしなひにもこよなくまさりて見えたまふを、例の、胸ふたがりまさりて、つくづくとまぼられたまふに、

（源氏の宮）「花こそ花の」ととりわきたまひて、山吹を手まさぐりしたまへる御手つきの、いとどもてはやされて、世に知らずうつくしげなるを、人目も知らず我が身に引き添へまほしくおぼさるるぞ、いみじきや。

（狭衣）「くちなしにしも咲きそめけむ契りこそ、口惜しけれ。心のうち、いかに苦しかるらむ」とのたまへば、中納言の君、「さるは、ことのはは多く侍るものを」と言ふ。

（狭衣）いかにせむ言はぬ色なる花なれば
心のうちを知る人ぞなき

と思ひ続けられたまへど、げに人も知らざりけり。

「立つをだまきの」とうち嘆かれて、母屋の柱に寄り居たまへる御狭衣のお顔だちはかたちぞ、なほ類なく見えたまふに、

こちらにお向けになったお目もとや　お顔だちなど　愛らしさは

山吹の花の艶やかな美しさや藤の花房のしなやかさにも格段とまさって

［狭衣は］いつものように　胸がいっぱいになって　思わず見とれておられると

お手にして興じておられる　お選び分けになって

山吹の花にいっそうひきたてられて　引きよせたくお思いになるのは　なんともはげしい胸の内の思いよは目も構わず

（狭衣）四 よりによって口無し色に宿命づけられたこの花の不運が　口惜しい

五 その実口無し（山吹）を詠んだ言の葉（和歌）は数多くございますのに

思わず嘆息をつかれて　ほんに狭衣の胸の思いを知る者は誰もなかった　つまらない恋心のせいで　よしなしごとにより

一〇 恋心を伝えるべくもない嘆きを言う。「いかでかは思ひありとも知らすべき室の八島の煙ならでは」（『実方集』。『詞花集』恋上にも）を引く。下野国の総社、室六所大明神の社前の池に八つの島があり、池中から常に煙があがるところから「室の八島の煙」と和歌に詠まれるようになったと言われる。

「ひとつ妹背」と育った源氏の宮への恋——主人公の憂悶の内実

一一 前の引歌を承けた表現。

一二 同じ家の、実の兄妹と。「おきて」は「掟つ」の連用形、思い定めて、取り決めて、の意。

一三 私は私だ。「ひとつ妹背」では収まらず、異性として恋うる心を言う。「君は君我は我とも隔てねば心ごころにあらむものかは」（『和泉式部日記』）。

一四 源氏の宮は何の隔ても置かず、自分を兄として親しんでおられたのに。以下、主人公の心中思惟。まず源氏の宮の心を推し量り、更に両親や世間の思惑に思いが及ぶ。「……と、……と」と心中思惟が断続するところに、思い悩む主人公の心が示される。

一五 父殿。父母ともに後文で改めて紹介される。

一六 「心ざし」は、愛情の意に多く用いられる。

一七 理性と感情との葛藤。自制すればするほど、源氏の宮への思いがつのるあやにくさ。

りめでたき御身を、「室の八島の煙ならでは」とおぼしこがるるさまぞ、いと心苦しきや。

（打ち明けるすべもなく恋い焦がれておられる様は）

と言っても

さるは、その煙のたたずまひ、知らせたてまつらむことも及びなく、いかならむ便りにてなど、おぼしわづらふにはあらず、ただ、二葉より露ばかりへだつることなく住ひたちたまひて、親たちをはじめたてまつり、よその人々、帝、春宮も、ひとつ妹背とおぼしめしおきてたるに、我は我と、かかる心の付きそめて、思ひわび、ほのめかしてもかひなきものから、「あはれに思ひかはしたまへるに、思はずなる心のありけると、おぼしうとまれこそせめ」と、「大殿、宮なども、類なき御心ざしといひながら、この御事は、『さらば、さてもあれ』とともよにまかせたまはじ。世の人の聞き思はむことも、ゆかしげなくけしからずもあるべきかな」と、とざまかうざまに世のもどきなるべきことなれば、あるまじきことに深くおぼしとるにしもぞ、あやにくに心はくだけまさりつつ、「つひにいかなるさま

（二 焦がれくすぶる恋心を「源氏の宮に」お知らせ申しあげるには全くの身分違いとか どのような手蔓で伝えたものかなどと 思い悩まれるのではなくて）

（幼少の頃からほんの少しの隔てもなく一つ邸に お成長なさって）

（世間の人々も）

（三 ひとつ妹背 お思いになり）

（心一つに恋慕の思いにかられ始めて 思い悩み 源氏の宮にそ）

（お扱いになっていたのに）

（一四 心外ないやらしい気持があったのだと）

（嫌われてしまうのが落ちだろう）

（一五 母堀川の上）

（一六 御愛情）

（妹に対するこの思いだけは）

（それでもかまわないが）

（決してお許しにならないだろう）

（かんばしい筈もなく悪評を受けるに違いないよ）

（の非難をこうむるに違いないことなので）

（意地悪くも狭衣の執心はいよいよ乱れつのって）

（一七 あってはならぬことと強く反省なさるにつけても）

（どう考えてみても）

（世間）

（最後にはどのように）

一 連用形で言いさした止め方。余情を添える。
二 世の通念、人情の機微として初めからわかっていることだが。以下、語り手（作者）の感慨吐露。草子地。主人公と源氏の宮との間に何が起るか、深刻な将来の、嘆息を交えた予告でもある。
三 「世の中」は男女の仲を中心に言う。
四 「生ほし立つ」は、養育する、育てあげる意。

堀川関白と一家の紹介——主人公の両親の紹介に始まるのは物語の約束

五 改めて物語が始まる。「昔」「今は昔」を常套とする物語の起筆が「このころ」に変っていることに注意。現在を意識しているのである。
六 主人公の父。大殿。大臣で関白を兼ねる。
七 上皇。
八 今上天皇。後の嵯峨院。
九 同じ后から生れた第二皇子。
一〇 父帝、母后（皇女）どちらから見ても、臣籍に下るはずがないと言うのである。「罪」は前世の罪。「ただ人」は、帝や皇族に対して臣下を言う。
一一 町四つの広さに屋敷を構え築地塀をめぐらせて。「町」は道路で区分した一区画。平安京では方四十丈（一二一・二メートル四方）。
一二 金殿玉楼。立派な建物。

にか、身をもなし果てむ」と心細く。今はじめたることにはあらねど、なほ世の中にさらでもありぬべかりけることは、あまりよろづまで優れておられるような女性のおそばには すぐれたまへらむ女の御あたりには、実兄ならともかく そうでない男性を は、いみじうともむつまじうこそ生ほし立てたまふまじきわざなりけれ。

五 このころ、堀川の大臣と聞こえて関白したまふは、一条院、当帝などの一つ后腹の二の御子ぞかし。母后もうち続き帝の御筋にて、いづ方につけても、おしなべて同じ大臣と聞こえさするもいとかたじけなき御身の程なれど、何の罪にかただ人になりたまひにければ、故院の御遺言のままに、うち代り、帝ただこの御心に世をまかせきこえさせたまひて、いとあらまほしうめでたき御有様なり。

二条堀川のわたりを四町築き籠めて、三つに隔てて造りみがきたまへる玉の台に、北の方三人をぞ住ませたてまつりたまへる。堀川二町には、やがて御ゆかり離れず故先帝の御妹、前の斎宮おはし

ます。洞院[一五]には、ただ今の太政大臣と聞こえさする御女、一条院の后の宮の御妹、春宮の御叔母よ、世のおぼえ、うちうちの御有様も、はなやかに頼もしげなり。坊門[一七]には、式部卿の宮と聞こえし御女ぞ、なかに心細げなる御有様なるべけれど、女君の、世に知らずめでたき、一人生みたてまつりたまへりけるを、内裏に参らせたてまつらせたまひて、このごろ中宮と聞こえさす。今上一の宮さへ出でおはしましける御勢ひ、なかなかすぐれてめでたく、行末頼もしき御有様なり。

かかる御なかにも、斎宮は親様にあづかりきこえさせたまひにしかば、やむごとなくかたじけなきかたも、御顔かたち、心様、なべてならず思ひきこえさせたまへる御方にしも、かくすぐれてこの世の物とも見えたまはぬ男君さへただ一人ものしたまふを、いかでかは世の常には思ひきこえさせたまはむ。千人のなかにだに、いとからむは、親の御心地にも、いかでかはすぐれて思ほしかしづかざ

[一五] 堀川寄りの二町。二条の南、堀川の東の南北二町に築いた邸宅。
[一四] かつての斎宮（伊勢神宮に奉仕する未婚の皇女）。
[一五] 堀川院の東、西洞院大路に面した邸宅。
[一六] 「一条院の后の宮の御妹、春宮の御叔母よ」は挿入句（はさみこみ）。太政大臣女の追加説明。
[一七] 洞院の南、三条坊門通りに南面した邸宅。
[一八] 式部省の長官の親王。式部省は朝廷年中の儀式を掌る。中務、兵部両省とともに長官には親王が任ぜられるのが通例。
[一九] 他のお二人に比して心細いとは、実家の勢威や境遇を言うのであろう。父宮はすでに故人らしい。
[二〇] もと皇后、皇太后、太皇太后の総称。一条天皇以降、両后並び立つとき、新たに立后された方を中宮というようになった。

主人公の登場――優れた出生と人となり　堀川関白夫妻の鍾愛ぶり

[二一] このように。冒頭の場面における主人公の印象を承けて言うか。
[二二] 本篇の主人公。
[二三] 堀川関白は、最愛の妻から生れたこの男君を、どうして尋常一様の可愛さに思い申されるはずがあろうか。

一　中将は近衛府の次将、四位相当の武官。三位、二位で中将に任ずる者を三位中将、二位中将と呼ぶ。特に二位中将の例は稀で、執柄の子息に限られていたようである。

二　大納言、中納言などを言う。ともに太政官の要職で、大臣とともに政務を担当する。大納言は正三位、中納言は従三位相当。ここは中納言をさすと思われる。

三　男君があまりに優れていて同じ人間とも思われないほどであるのを、父関白はかえって心配し配慮して、目立たぬよう納言にもしなかったのである。

四　「あえか」は、かよわく華奢な様子。「いまいまし（忌忌し）」は、忌み慎むべきだ、不吉だ、の意。

五　『法華経』化城喩品の句。釈迦を大通智勝仏の第十六子とする仏説。わが子を崇めて、娑婆世界の一大光明である釈迦になぞらえたもの。

六　「あやふきもの」は心配なもの。平安時代には、あまりに美しく優れた者は早世するという思想が根強かった。

七　「ゆゆし」は、不吉である、縁起でもない意。不吉なまでに美しい意に用いられることも多い。

八　大空を覆うほどの袖があったら、さぞかし頻繁にお使いになるだろうと思われるほどの。「大空に覆ふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ」（『後撰集』春中）と同趣の発想。

九　「ことたし」は、はなはだしい、ことごとしい。

れようか［狭衣は］らむと見えたり。このごろ、御年二十にいま二つばかりや足りたまはざらむ。二位中将とぞ聞こゆめる。普通のお家柄の方でさえなべての人だに、これほどのご年齢かばかりにならば当然おなりになるところである狭衣の納言にもなりたまふべきぞかし。されど、この御有様のあまりこの世の父関白は万事を御配慮になり控え目にされたのであろうの物とも見えたまはぬに、よろづをおぼし怖ぢたるなるべし。これをだに、母宮は、「児のまだ子どものようなのにやうなるものを」と、あえかに、

この二位中将の官位でさえ

不吉なまでに心配していらっしゃるようだが

いまいましきまでおぼいたんめれど、おしなべての殿上人にて交らひたまはむが心苦しさに、内裏の上などの、せちになさせたまへる命になったのだったなりけり。

狭衣がありきたりの殿上人として

帝などが強くおっしゃって二位中将に御任

（両親心）

「『第十六我が釈迦牟尼仏』と、この世の光のためと、げに顕はれたまへる」と、かたじけなくあやふきものに思ひきこえさせたまひて、雨風の荒きにも、月の光のさやかなるにもあたりたまふを、痛はしくゆゆしきものに思ひきこえたまひつつ、覆ふばかりの袖のいとまなげに、あまりこちたき御心ざしどもを、大人びたまふままに、あ屈り苦しくおぼす折々もあるべし。夜などおのづから紛れたまふ夜な

［若君は］

勿体ないこの世から去ってしまうかもしれない心配なものに

大仰な御両親の御愛情を［狭衣は］

入目を忍んで外出な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com